





昭和
日本百雄傳——第十五篇

坂井順一

弘毅 黃一謙玉



辭題下閣毅弘田廣

臣大務外前
臣大理總閣內前



福

壽

嘉道



原 嘉道閣下題辭

樞密院副議長
前司法大臣



藤井順一氏小照



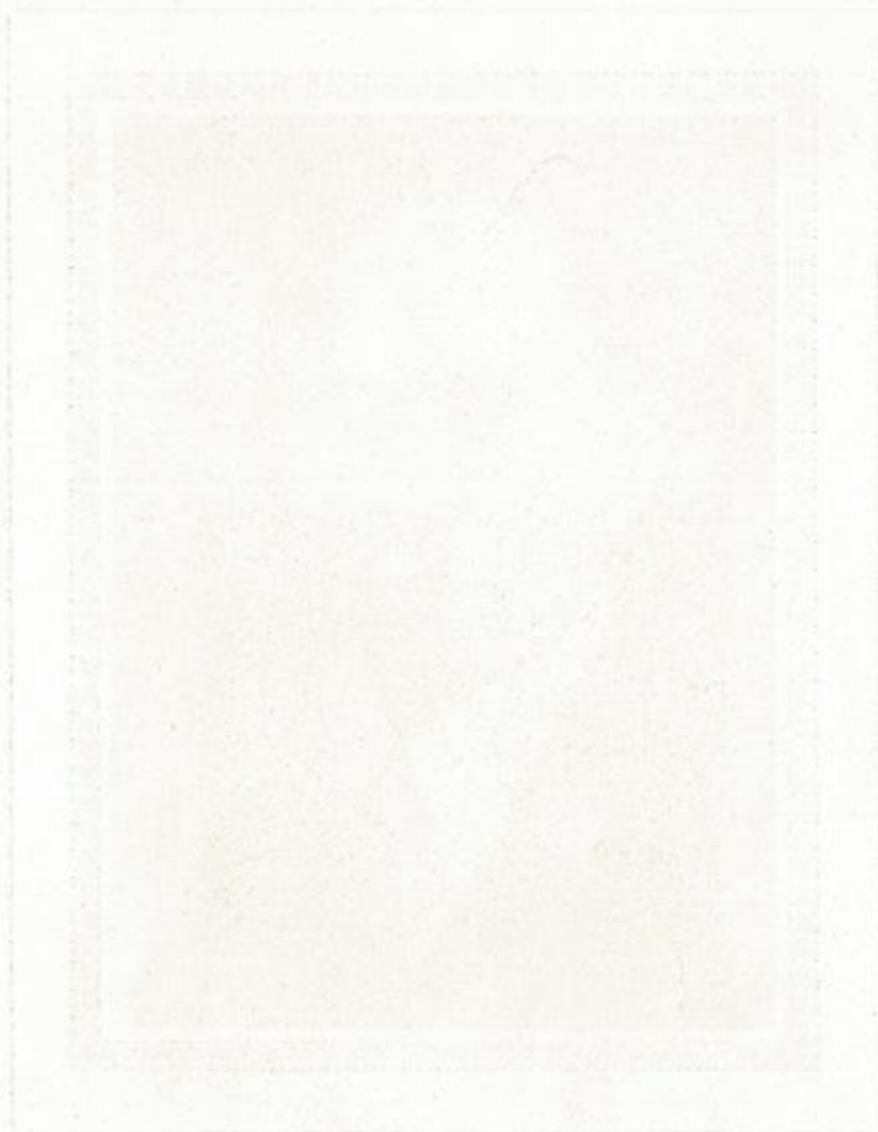
明治三十四年、渡布時代の同氏



明治三十二年、日本に於ける藤井順一氏少年時代の同氏



明治四十四年、布哇時代、同上夫妻

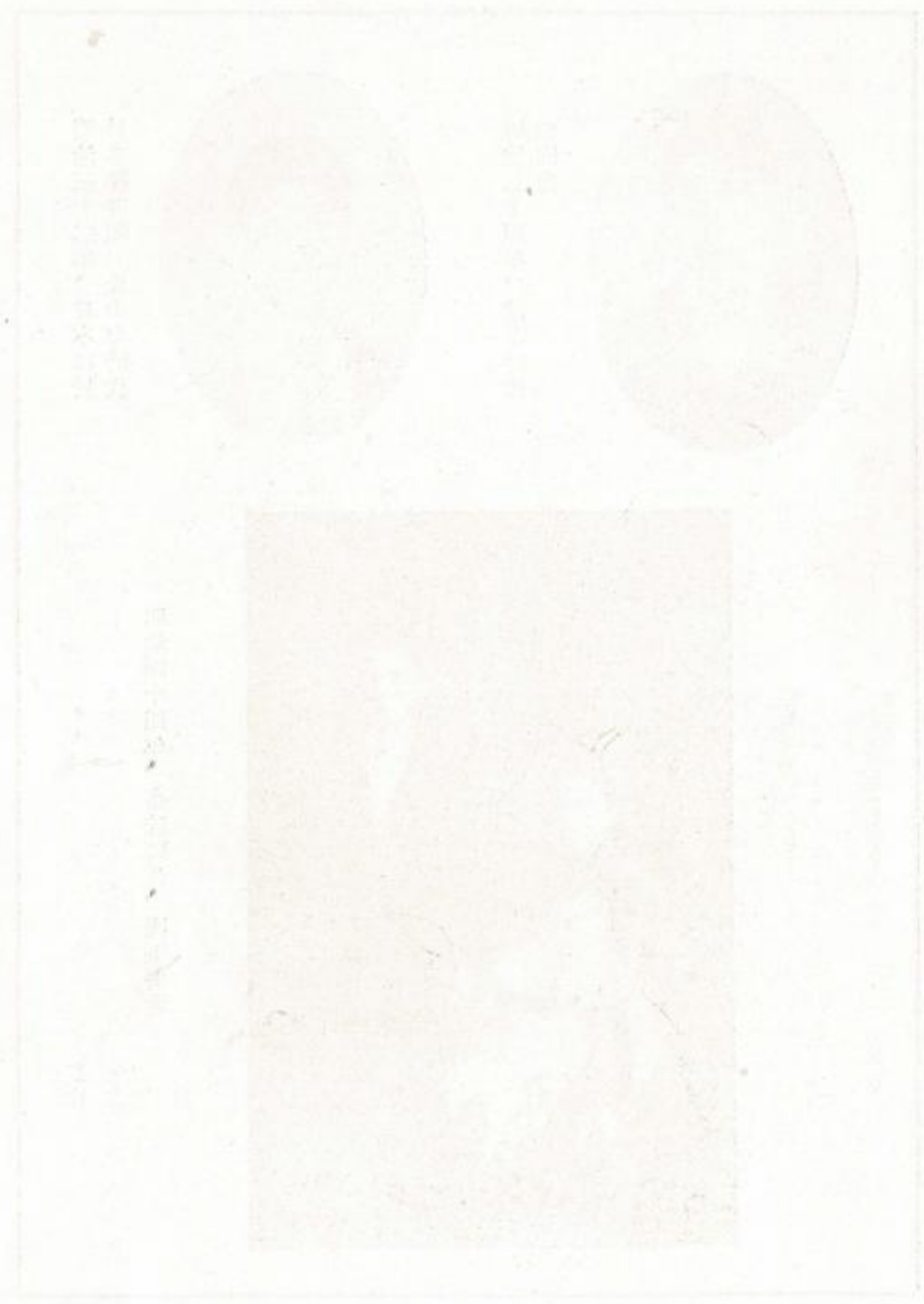




明治四十四年アラバーク野球時代布哇ホノルルに於ける、ホノル、倶楽部優勝記念
最後列、向つて左より四人目マネジャー藤井順一氏



大正六年布哇の記念小照 舊邸前にて、向つて左より
長男順三氏、藤井順一氏、三男春雄氏、夫人かつ子、
四男洋一氏次男勝雄氏

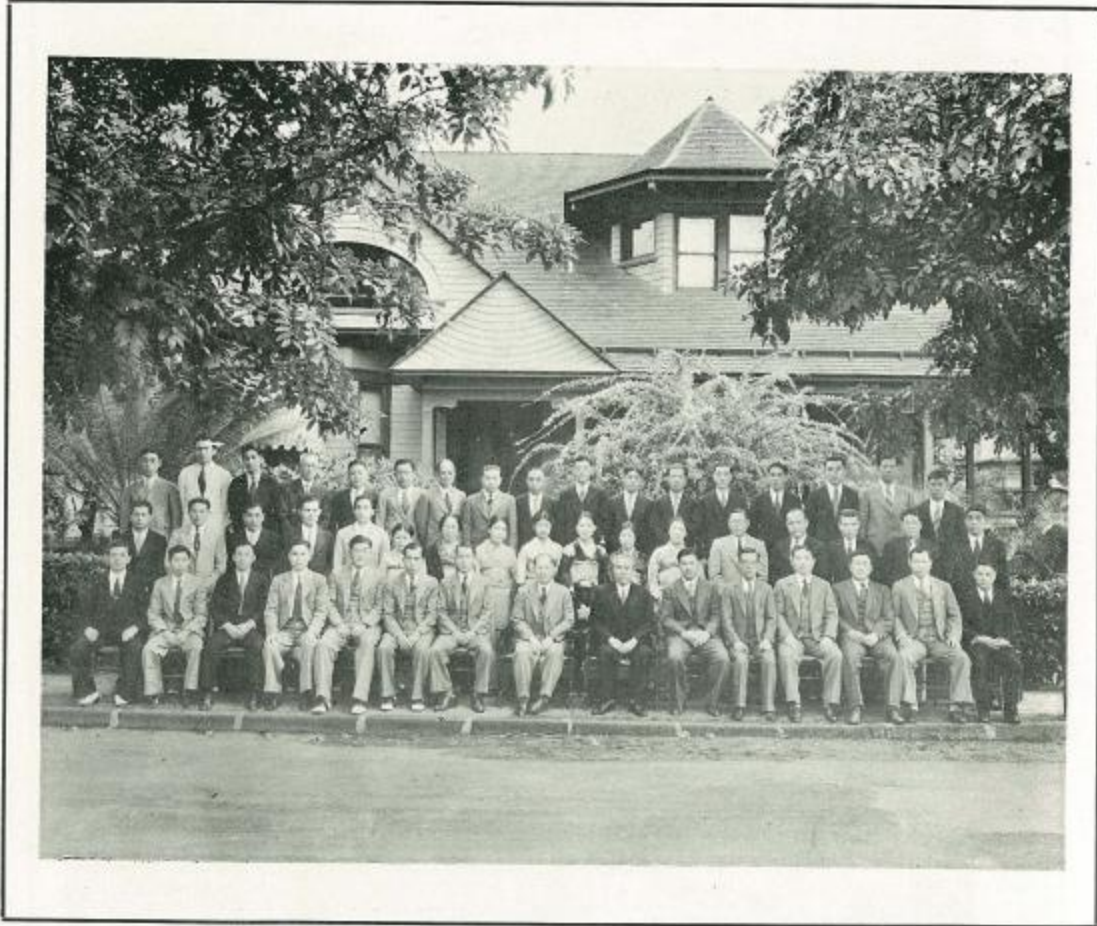




大正九年廣島材木町本邸庭前にて

前列 向つて左より長男順三 夫人かつ子（抱かれたるは 長女かつえ）

三男春雄 巖父重助 次男勝雄 藤井順一 四男洋一 井上博の諸氏

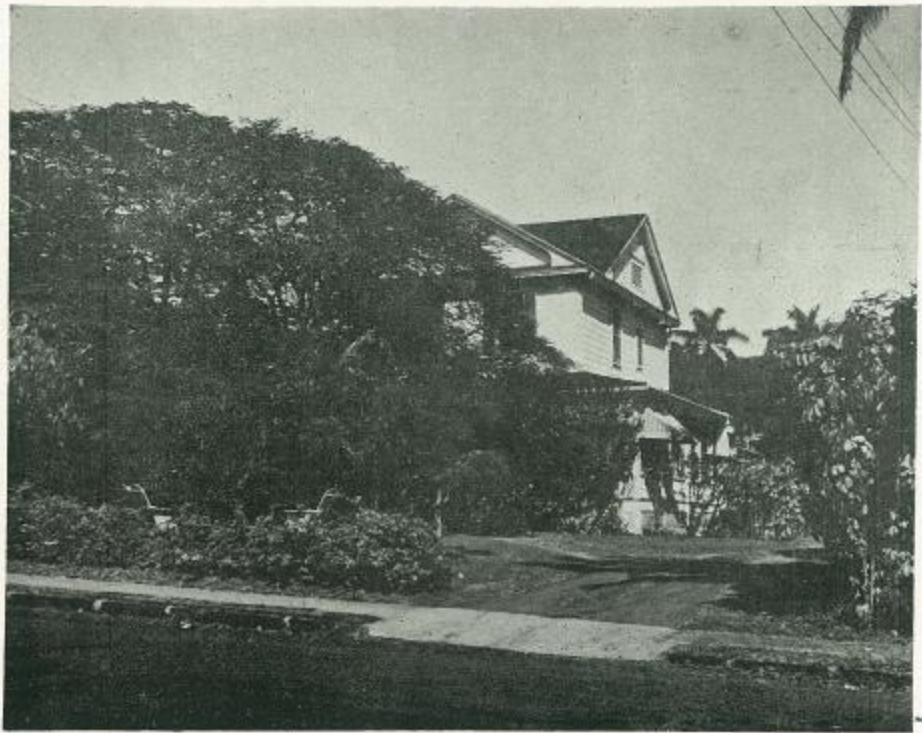


昭和十二年 ホノルル市ペンサコロ街舊住宅庭前にて

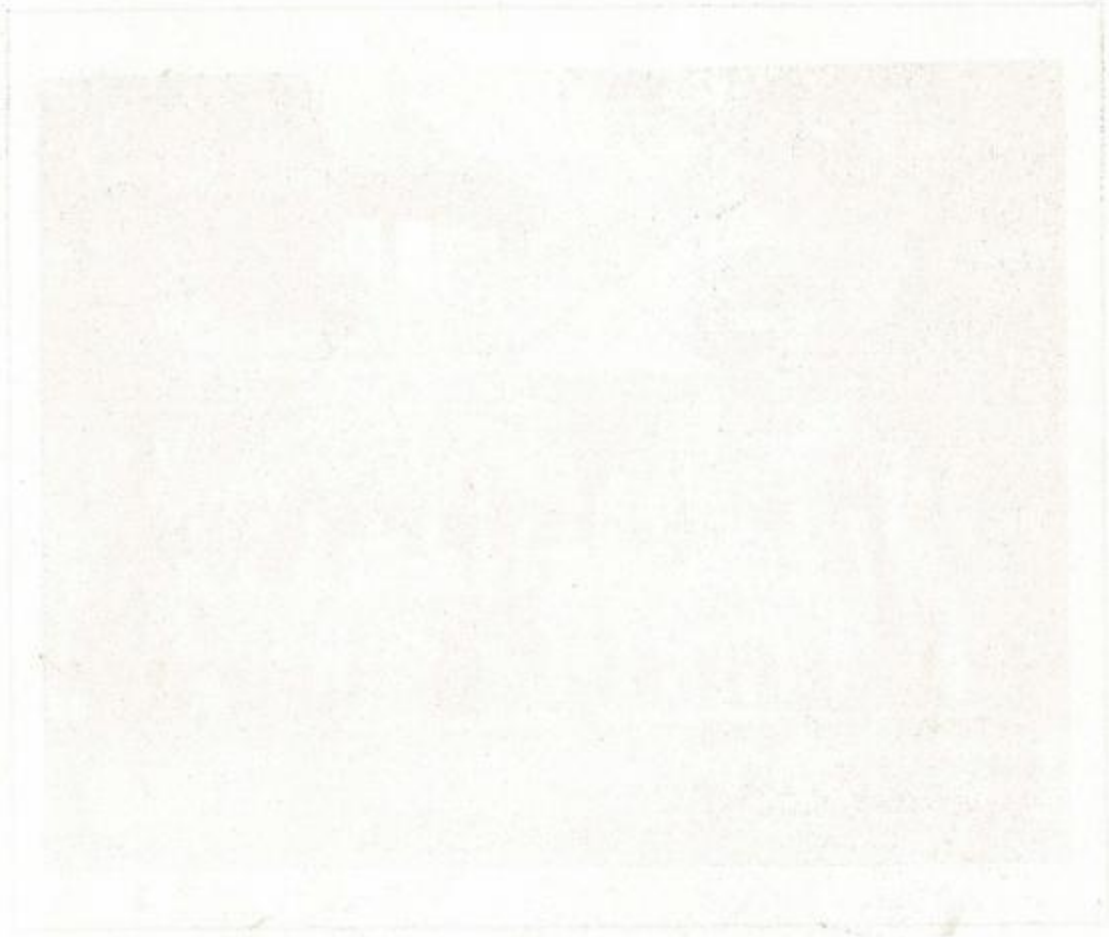
前列 向つて左より 大方榮一 藤井茂雄 西村恕一 (むさしや呉服支配人)
中野耀 左右 店主藤井順一 總支配人藤川壽郎 令息藤井順三 玉田一二三
大嶋重雄 尾崎澤次郎 (富士酒造會社支配人) 香川勇夫 西本實の諸氏



廣島の別邸（廣島市中島本町三二）



ホノルルの新邸（ホノルル市ペンサコラ街ハツセンヂャー角）





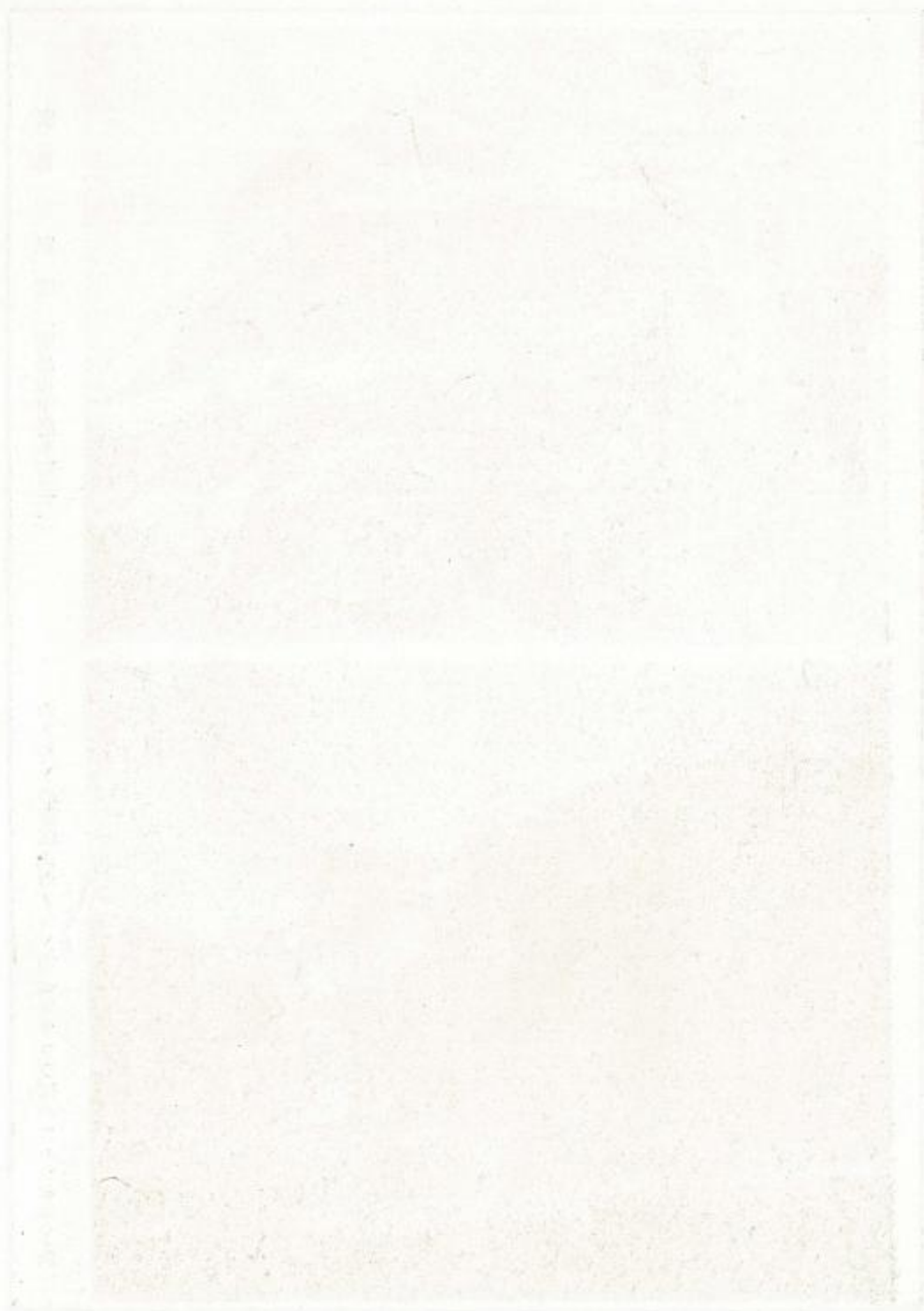
藤井商店仕入部及藤井倉庫會社建物
(廣島市中島本町二二)



東京市別邸
(品川區五反田五ノ六〇)



藤井商店仕入部舊事務所 (廣島市材木町二二)



序

昭和日本の百雄を選び、第十五編に至り、海外雄飛の權威として藤井順一君を得た蓋、滿洲、支那、南洋、南米方面に之を求めば、猶幾多俊傑の傳ふるに足るものあらむが、茲に北米合衆國の領域内に於て、特に同胞移住五十餘年の歴史を誇る布哇に於て、先づ君を得て之を傳ふるここの出來たのは、吾人の頗る光榮とする所にて、聽て君に亞ぎ、他の方面より更に之を撰擇して膨脹日本の光輝を併せて傳へたいと思ふ。抑、君の警咳に接し、君の行徑を檢し來りて、最も他の範とするに足るものを約言せんか。

- 一、能く自個の天分を知り、實業を以て終始一貫せる事
- 一、努力奮闘、如何なる艱苦をも征服し得た事
- 一、時勢の趨向を看取し、商機を擱むに敏なりし事
- 一、公私の別を明かにし、多數配下の統率に長じ、能く協力一致の妙諦を發揮せる

事

一、移住地と母國とに相對立して商陣を張り、内外聯結の緊密を得たる事
一、富んで傲らず、盈ちて溢れず、大益大ならんとするの陣容の、年と共に發揚し

つゝある事

本傳を讀破して先づ直覺さるゝは以上の數點であろう、而して此等の特長は、時勢の推移と共に益々煉磨完成され、一大成熟の域に到達しつゝあるのを見る。故に吾人は更に今より十年の後に至り、君の事業と其人とを再検討して、好個の針盤を千歳の後に留めん事を期待し、且つ君を禮賛して、別に當代名流の筆に成る「福壽帖」を贈呈し、更に君の自彊大成を禱るものである。

昭和十三年十一月三日 明治節、出征、皇軍大捷の謳歌を聞きつつ

昭和十三年十一月三日
編輯局に於て

藤井石童識

昭和十三年日本百英雄傳

第十五編

藤井順一

一、海外雄飛の權威

東亞の島帝國たる我が日本の強大を加へつゝあるのは一に國民の奮起して内外發展の一途に猛進せるが爲めである。而も其れは今回の日支事變を一轉機として益々鼓舞作興の必要に逼られてゐると共に、今日の趨勢を促がし來れる所の雄飛の魁をなし、猶且つ益々進んで子弟を誘導し、郷黨を獎勵して、我が海外移住國策の不言實行の雄者即ち功勞者あることを見道がしてはならぬ。

回顧すれば我邦にありて海外への集團的移住者を出

せるは、明治十八年の布哇移民を以て嚆矢とし、爾來五十年の星霜を閲みし、布哇にある同胞は十五萬餘に上り、其の過半は米國市民權を有し同胞間の産業、貿易共に著しき繁榮を來たし、今回の日支事變に對しても既に二百幾十萬圓の義捐をなせしと云ふに見ても、我が海外移住地として布哇の最も光輝ある成果が認められる。

在布同胞が、過去に於て、其祖國より何等の物質的後援や、強力な實際的保護を與へられざるに拘らず、

身を挺して苦難と闘ひ、社會の繁榮を建設して行きつゝ、尙直接間接に祖國に貢獻したところは、決して看過し得ないものがある。其の物質的方面を見れば、先づ對布貿易で、これは輸出のみの殆んど片貿易ではあるがその貿易支拂額は昭和十二年までに約九千餘百參拾六萬ドルにして、布哇に於ける動産及不動産は推定約五千萬ドルに達し、彼等の過去五十三年間に母國へ送金乃至持歸りたる高は、貿易支拂額を別にして約四億圓に達する見込みである。又彼等が祖國の天災や事變に際して寄附した額を見るに明治廿七、八年日清戰役には約一萬五千圓、同廿七、八年の日露役には四拾貳萬四千圓を據出して母國へ寄贈し大正拾二年の關東大震災には七拾貳萬五千圓の寄金と多大な物資を送つて被害者の救恤に努め、今次の支那事變にも既に約百六十萬圓の恤兵金、國防献金を爲し、多量の慰問品を故國に送附した。其他明治卅八年の東北三縣凶作義金同四十三年の水害救濟金、大正二年の九州東北救濟義金大正三年の日獨戰義捐金、昭和二年の丹後震災義捐

金昭和六年の滿洲事變の義金及三陸飢饉救濟金、昭和九年の函館火災義捐金、同近畿地方風水害義捐金等の總計は數十萬圓に上つてゐる。

精神的方面の貢獻を見れば、日清、日露戰當時の壯丁の歸朝出征を始めとし平時に於ける日本文化の紹介や、民間に於ける日米親善の増進、日本の誤解一掃等に於て彼等の竭したところは甚大である。即ち彼等は海外發展の先驅者として成功の模範を示し、平時に在りては日米親善の一大楔子として活躍し、一朝事ある場合は起ちて母國の爲めに辯護し、献金して遺憾なく物心兩方面の後援を行ひ、海外に在りて母國に何等の損害や悪影響を與へず、而かも彼等は母國品の輸出を助長し、日本文化の海外進出に寄與して居る。

斯く輝かしき布哇移住者中より、最も傑出せる權威者を擧げて、本傳を飾り、且つ今後多々益々緊迫せる海外雄飛の空氣を昂揚せんとする其の模範として茲に藤井順一君を紹介し、其の奮闘努力の活歴史を禮賛するものである。

二、藤井王國の陣容

凡そ移住地にある多くの人は、赤裸一貫より崛起し粒々辛苦の汗を積んで産を成してゐる。而して移住者としての眞の價値は其處にあるが、中には往々多少の産を成すと天晴れ成功者になり濟して歸國する、謂ゆる錦衣歸郷といふ格である。然るに其れが單に慕參歸省などなれば宜いが、一切の清算を濟して移住地を引拂ひ、歸朝後の幾年は得意な生計を営むも、間もなく故舊親戚等の勸むるがま、に種々な事業に手を染め、忽ち虎の兒の様に携へ歸れる資金を蕩盡し、再び舊夢を尋ねて渡航するのが例となつてゐるが、此は畢竟、折角築き上げた移住地の基礎を棄てたからである故に思慮ある人は決して此の基礎を棄てざるのみならず、内外相待つて益々鞏固にする、其處に初めて海外發展の大きな光明が輝いて來るのである。即ち藤井君の事業の如きは其れを型通りに強化して行きつゝ、あるのである。今、君の日布間に敷ける陣容を概観する。

A、布哇に於ける事業の一斑

藤井君の布哇に於て經營する事業は三種類にて、其營業系統及資本金を列記すれば左の通りである。

- 一、藤井商店
- 所在地 布哇ホノルル市ホテル街。
- 創立 大正元年十一月。
- 資本金 拾五萬弗 運轉資本、四拾萬弗。
- 商標 菱形枠の中に「NF」と記す。
- 營業系統 食料雜貨、呉服類直輸入卸商、酒類卸部及漬物部も有り。
- 使用人員 四十五名。

一、富士酒造株式會社

- 所在地 布哇ホノルル市カカアコ・クツク街。
- 創立 昭和拾年二月神田竹太郎氏經營のもの五萬弗にて買収し、富士酒

造株式會社と改稱後増資して現在に至る。

資本金 參拾萬弗、拂込金貳拾貳萬五千弗
釀造酒 富士正宗及樂園を釀造し、一般卸

問屋に販賣す。

釀造能力及販賣高 釀造能力一ヶ年一萬二千石
販賣高同七千石

使用人員 七十名。

一、株式會社むさしや商店

所在地 布哇ホノルル市北キング街。

創立 昭和三年むさしや呉服店を買収し

て株式組織とす。

營業系統 和洋呉服類の卸小賣。昭和十三年

洋服部を新設して既成品を販賣す

使用人員 十五名。

以上三社の營業高は一ヶ年數百萬弗に上つてゐる。

B、内地に於ける事業の概要

一、藤井商店輸出部

所在地

昭和十三年六月廣島市材木町二十
二より同市中島本町二十二番地の
藤井倉庫株式會社建物内に移轉し
て今日に至る。

創立

大正八年四月。

營業系統

布哇の三會社の販賣及使用する各
種の商品の仕入れと、此れが輸出
を爲す。

一、藤井倉庫株式會社

所在地 廣島市中島本町二十二番地。

創立 昭和十一年四月。

資本金

貳拾五萬圓、積立金を加算すれば
約參拾萬圓に上る。而して實際は
約七拾萬圓を運用しつゝ、あり、目
下資本金壹百萬圓に増加考慮中な
りと聞く。

一、個人資産の運用

君は此の如く内外幾多の會社事業經營に傾倒する

傍ら、個人資産の運用にも最も心を碎き意を用ひ
て、能く時勢の趨く所を見、機會の捉ふべきを捉
へて活殺自在の敏腕を振ひて懈らず、居然として

茲に藤井王國を築き上げるに至つたが、猶熾んに
進軍譟を展げつゝ、あれば、今後の大成を更に刮目
されてゐる。

三、艱難汝を玉にす

古來政治家にせよ實業家にせよ、赫々たる聲名を博
せる人々の行徑を尋ねれば、皆な辛苦艱難を嘗めざる
ものはなく、而も其れが深酷なだけ其人はより練磨さ
れ、其の事業はより堅確である。本篇に説く藤井君の
如き、其の前半を辿れば、文字通りの艱難辛苦を嘗め
盡して居る。

君の今日の大成を齎らせるは、勿論其の天稟の優越
なるに依るべきも、而かも一半は即ち艱難汝を玉にす
と言ふ古賢の言を文字通りに實現した結果に成るもの
として特に景仰すべきものがある。今その前半生の行
程を畧叙して他の針盤に供したいと思ふ。

郷里に於ける少時の體驗

君は藤井重助氏の長子として、明治十七年七月廣島
縣佐伯郡平良村に生る。六才にして早くも母を喪ひ、
九才の時には父を布哇に送り、郷里に在つて祖父に撫
育されたが、家には相當恒産が有つたので、田舎に相
應はしき教育を受ける事が出来た。其頃の小學校は尋
常四年制度で、別に補習科一年があつた。

そして高等小學校は一郡中に一校位しかない有様で
あつた。君は初め軍人たるの志望に燃え、陸軍士官學
校に入ることを望んで居たが、小學校在學中に種々熟
慮の末初志を變更し、將來は商人として起ち實業界に
雄飛するの決心を固めた。その爲めに高等小學校への
入學も中止に決して、只管實地修業に携はるの機會を

俟つてゐたが、恰も好し、郷里の近くに西尾商店といふ醤油味噌醸造の外、板材木、木炭、雜穀雜貨類を營業する問屋があつたので、君は年齢僅かに十二才にして其店に見習として入つた。然るに君は學校に於て常に首席の好成績にて押通してゐたので、教師は將來有爲なる其才を惜しみ、是非補習科及高等科を経て學校に進むよう頻りに慫慂し、校友も亦た同輩の學績を惜しみ君を學校へ引戻す可く、友情に厚き二三十名の生徒は、一日相伴ふて君を店に訪ひ、熱心に復校を説いて歌まなかつた。

恩師の厚志に感じて居た君は、更に學友の此の熱情に感激深謝したのであつたが、而かも一度心に堅く決する處あつて入店して居た君は、遂に志を翻さず、再び學校には歸らなかつた。

已に牢固として抜く能はざる君の決心を見極めた、満田校長は、茲に於てせめて學校の名譽のためにも君を卒業せしむ可く、態々君の實家に來訪し卒業試験を行つたので、小學校補習科を完全に卒業する事となつ

に出る途中に位してゐた。廿日市町は廣島市より約三里の距離にて、山間から出る板材木の集散地であり、雜穀等の取引も頗る盛んであり、廣島市及京阪への積出しを控へて相當榮へてゐた。

一體この廿日市町の奥地は其頃有名な材木の産出地で、特に八田といふ植林の大家も有つた。廿日市町はさういふ土地柄であつたので、附近奥地の人々は各種の出産物をそこへ運び出して交易するのであつたが、西尾商店は其途中に在つたので、廿日市へ出る人々を捉へて商買するには至極都合の好い地の利を占めてゐた。然しさうした地の利は有るといふものの、取引上には非常なる苦心を要する立場に在つた。即ち同店は一般雜穀を附近の村々及廿日市より買ひ集め、一方山間奥地より出廻る板、材木、木炭等とそれ等雜穀及醤油味噌と交換賣買するのであつた。そして其引受けた板材木及木炭は更に廿日市の問屋に轉賣するのであるか、有様にて高く買ひては引合はず、さりとて安く買はんとすれば廿日市に持ち行き賣つて呉れない

た。併し斯ることは同校の過去に於て例のない事であるのみならず、他にも恐らく類例のないことであらう由來満田校長は漢學の造詣深く、敬服すべき人格を備へ、地方には稀に見るの人材であつたが、極めて朴訥にて且つ吃音の人であつた爲め、世に出ることなく、惜しくも小學校長を以て草深き郷里に埋もれて一生を過した。

時恰も明治廿九年、我邦は日清役直後の戦勝新興景氣で、國民は活氣に燃えて居たが、而かも猶未だ勞働賃銀は安く、諸物價も低廉にて、今日から考へれば全く嘘の様な情態であつた。人を雇うにしても現代の十數分の一の經費で事足りる有様で、女中の如きも月々決つた給料は與へず、盆暮の年二回木棉着物を作つて着せれば義理が濟むような時代であつた。従つて總ての諸式も安上りであつたし、物の價は評價がずつと低いのであつた。

君の見習ひとして入つた西尾商店は、海岸に近き廿日市より約一里許り奥手に在り、山間奥地から廿日市

といふ情態であつた。之を賣り手の方より見れば、若し西尾商店が廿日市の店と同等の値段で買ふなら態々往復二里の廿日市まで出る必要はなく、西尾商店と取引するのであるが、然し廿日市に於て一錢でも高く賣れるなら其方へ運ぶのであつた。當時は勞力や時間を費すことを餘り問題としてなかつたので、右の様に一錢でも高く買ふ方へ持ち行くのであつた。

故に其間に立ちて營業上の利得を圖ることは、人に知れない苦心を要し、未だ少年の身に在り乍ら君の苦心と努力は筆紙に盡せないものがあつた。

其頃附近の農家は別に副業を持たなかつたので米麥を賣つて金銭に換へ日用品を求めたのであつて、それらの穀類は君自ら買受けて居たが、中には廿日市へ出るのは序なれば、一錢でも高く賣る方が良いと強硬に主張する者が有り、君は止むを得ず廿日市の問屋と同値段で商談を決める事も尠くなかつた。斯かる場合君は舛の量り方に據つて利得を生み出したもので、上手に量れば一俵にて五合乃至一升位の増米があつた。然

し其の計り方には非常な技術を要するので、君は其研究に多大な努力を拂つた

板、材木の取引の方でも前述の様に困難な事情が伴ふので、利潤を得る爲めには頗る頭腦を碎かねばならなかつたが、西尾商店は此れ等引受品の運搬に要する常雇ひの大八車を二台備へてゐた事よりすれば、田舎としては相當の取引をしてゐたことが窺はれる。

當時は日清戦役直後にて吠の需要が多かつたので、是を農家の副業として織らしむれば、一般の収入も増加し、品物を買取る商人も利益を得、双方の繁昌を來す譯であつた。早くもここに着眼した君は本業に日夜精勵する傍ら、當時約三百の戸数を有する西尾商店所在地の原村及平良村の一部に吠の製造を奨勵し、瞬く間に全農家をしてこれに携はらしめた。そして君は其買入れに従事し自他に共に利益し、多くの人から好感を寄せられ、茲に自然的に共存共榮の實を顯はしたのであつた。

店の營業は斯の如く、醤油、味噌の醸造、板、材木

木炭及雜穀、雜貨の卸賣の上に、更に吠の賣買がありその一つ／＼に専任の店員が居て營業に携はるとすれば五六人を要したが、それを君は一手に引受けて晝夜共寸暇なく、全身是活力其物の如くに立働いた。當時店主は既に相當の年配であつて、店務は君に一任して居たが、其主人の女婚は殆んど留守であつたので、君は何から何まで一人で切り廻はさねばならなかつたそれだけに其苦勞も甚大であつたのである。

君の少年時代は躰軀倭少であつたので、當時十二才の君は普通の子供よりも小さく見へたので、君の此の才氣と活動とは一種の驚異として見られてゐた。それは君が四十才位の老巧な、吠の専門的仲買人に對抗して一歩も劣らなかつたことを見ても容易に想像せられる、而かも君には此の吠の仲買は店務の一部分に過ぎず、外に醤油、味噌、雜穀、雜貨、板、材木の賣買や其集金など、多忙にして重要な店務を一手に斷行して居るのである。それは到底少年の業とは思はれなかつた。

此の献身的な君の努力が何處かに反映しない譯はない。宜なるかな其効果は着々と現はれて、君が此店に

在る多忙な三ヶ年間に、主家の爲めた莫大な利益を擧げることが出來た。されば三ヶ年の後、君が海外雄飛の志を抱きて渡布すべく、其決心を主家に打明けた際主人西尾氏は君の才を復となく惜しみて、手離す事を非常に残念とし、極力引留めんとし、且つ懇願した程にて、君の努力と功績を終生感謝したといふ事である

ホノルル市藤井商店前支配人藤井壽郎氏の曰ふ所に依れば、其主人なる人物は村内有数の農家の長男に生れ、相當資産有る家督を相続すべき身であつたが、其家の家憲が農業に従事する者に非ざれば、家督を相続し得ないと規定して居た爲めに、止むなく家督は次第に譲り、自らは商人として立ち後年田舎では珍らしい巨萬の富を成した人であると言ふ。また其主人西尾氏には福太郎といふ息子が有つたが、或時西尾氏は藤川氏の父に語りて曰く

「福太郎の度胸の大なるは量り知れず、又順一の才能

は將來必ず恐ろしき人物とならん」と。

まことに梅檀は二葉より香ばしとかや、後に福太郎氏は廿日市に出て屈指の材木商人となり、君は實業家として今日の大を成す、その片鱗は既に少年時代に明らかに見得るところであつたのだ。

惟うに、君の此の三ヶ年の商業見習時代は、後年の大を爲す最も重要な基礎を成したのである。此時の體驗に依りて君は、仕入れと販賣の中樞要素を掴み、商眼を養ひ、商才を練つた。そして苦難に耐ゆる精神を益々鞏固にし、全く商賣といふものをマスターして自信を得た。斯くて後年の大成を保證すべき心的要素と、身体とを双つ乍ら併せて把握したのである。

復た、此の時代を君の性格上から検討してみると、君が終始一貫して來た理想の第一條である「共存共榮」の精神の閃めきが、その副業として吠の製造を奨勵したことを始め商取引上に窺はれるのである。そして物事に熱心で、何事であれ一度び手を付ける以上は、徹底せすんば已まぬといふ性格が、其奮勵努力と、晝夜

店務に飽かなかつた活動振りに明確に見て取られるのである。其他着實濃厚、人事を盡くして天命を俟つといふ性格の閃めきも見られるが、上述の二大要點は、

四、布哇に於ける健闘

君の海外雄飛の途に上れるは明治三十二年にて、齡僅かに十六才の時であつたが、既に其の身心の鍛練に於ては、遠く常人を超越してゐたので、他日の飛躍に要する素質は備はつて居た。此の壯途に上るまでの君は、西尾商店に於て到底他の追隨を許さぬ奮闘努力を爲し、驚異的の功績を残したことは、前章にて略述したが、その繁忙なる業務に携はり乍ら、小學校卒業以來は、寸暇を利用して能く讀書し、勉學研鑽に力めると共に、又眼を世界の大勢に注ぎ、能くその趨向を洞察し、世情を觀察しては復た人事の機微に通じ絶えず「明日」の日に眼を注いでゐた。されば布哇渡航を決するに至つたのも、決して一朝一夕の輕舉ではなく

後年君をして大を成さしめ、富を積む上に益々それが磨かれて來たものとして見逃し得ない重要な要素である。

各方面から熟慮研究し、將來を遠觀してのことであつた。而して機は遂に熟して、太平洋の中心に日米の交驛を司る布哇に、その駿足を伸ばすの時は來たのである。

當時太平洋には未だ今日の如き豪華雄大な客船は航海してゐなかつた。契約移民の渡布盛んなる時代のこゝとて、多くは移民船か貨物船であつた。君を載せて行つたのは英國貨物船を改造せる「レンノックス」號にて明治三十二年八月廿七日に神戸を出帆横濱に向ひ同九月二日横濱を出帆したのであるが、兩港より乗船した移民は約七百名に上つてゐた。同日他にも「ゲールック」號の外一隻の移民船が横濱を出帆、布哇に向

つたが、此の中一隻は契約移民約一千名を載せてゐた其頃渡航者は殆んど契約移民で、その外にも極めて少數の自由移民があつた。契約移民は一名に付廿五圓乃至卅圓の渡航費を要し、布哇砂糖耕地會社が其半分を負擔して、移民會社の手を経て渡布したもので、着布後は先方に於て決められたる耕地會社に配せられ、三ヶ年の契約年限を勤勞しなければならなかつた。自由移民は自身の出費に依つて渡航し、上陸の際は百圓の見せ金を所有してゐなければならなかつたが、然し上陸後は何れに赴くも自由であつた。君はこの自由移民として行つたのである。

斯くて「レンノックス」號は九月十六日ホノルル港に到着、乗船者は現在の移民局の對岸に在つたコーラントンに收容されたが、其際横濱を同日に出帆してホノルルに先着した「ゲールック」號の移民はコーラントンから出所しつゝあつた。そして君等は一週間の時日を経て其所を出でたが、其際もう一隻の移民船で來た人々が到着して入り替りに收容されたのである。當

時君の同船者には後年の成功者たる長尾健一氏があつた。レンノックス號の運賃は卅圓内外であつたが、君らは種々な名目の下に支拂はせられて結局約七十圓といふ法外な金を捲き上げられ頗る残念に思つた。即ち此の七十圓の外渡航費一切は總て君の過去三ヶ年間に勤儉貯蓄した謂はゞ汗と膏の結晶であるから、より貴重に感せられたのであつた。

その當時のホノルルは、既に相當の日本人が住居して居たが、後年人呼びて「暗黒時代」と言つた時代で何となく秩序は亂れ、日の出俱樂部は現在のマウナケア街あたりを中心に根を張り人々に恐れられてゐた。

當時は一般に富の程度は低く、生活費も、賃銀も低廉な時代であつた。三四年働いて故郷に錦を飾る人もほつ／＼有つたが、さうした人で日本金千圓も持つて歸れば近方の大評判になる程であつた。

首都ホノルルに一週間滞在した君は、次でヒロ市に在る嚴父の許に赴き、ユニオン・スクールに入學し、他日の活躍に備ふる爲め先づ語學の勉強から始めた。

當時のスクール・メートには佐伯隆一氏や畑與市氏が在つたが、何れもみな後年の成功者である。元來少時小作りであつた君は、十四五才頃より急に身長が伸び出したので、此頃は既に他の生徒より比較的格幅が大きかつた。その爲めに未だ語學が解らない君をドン／＼進級させるので聊か面喰つたと君は微笑し乍ら述懐する。

君は此のユニオン・スクールに在學し専心語學の勉強中も、君のモットーとして只のんべんだらりと學生生活を送ることを以て足れりとはしなかつた。勉強の傍ら絶へず世情を觀察して、何か爲すあるを窺つて居た本校の授業は午後二時項終るので、此の放課後の時間を有用に使ひたいと言ふのが、其頃の君の一つの念願であつた。其當時は甘蔗の小作が盛んな時代で、良好な土地は次から次へ開拓されて行きつ、あつたが、附近に一ヶ所丘の斜面で馬や鋤が入られない土地が若干放擲されてあつた。慧眼な君は此の土地に著眼しこれを借り受けて、放課後開墾し相當手廣く甘蔗耕作

を始めた。何事にもあれ一旦自ら決心して着手すれば全力を之に傾倒せざれば駄まぬ君は、毎日放課後は土まみれになつて働らき、粒々辛苦を重ねた。丹精の効は間もなく現はれて甘蔗は見事に成育を遂げ、第一期の收穫期には其上り高は優に五六百弗と見積られる程の出来榮えであつた。

然るに愈々耕地會社の手に依つて切り取られて決算する段になると、耕地會社は君に對して僅かに百五十弗しか支拂はなかつた。之に依つて君は會社が其當時の小作業者に對して相當酷薄なる搾取主義を行ひつ、ある事を確知し、これを改善せざる限り如何に勞働者が働くとも、其勞に正當の酬ひを受ける時期は來ないと思つた。この事は後年問題となり、甘蔗の計量の際に小作者が立合ふことになつて稍改善されたが、而かも當時の形勢としては容易にそれが改善される見込はなかつたので、君は二回の收穫を限りとして小作業業を断念し、本來の志望たる商業を以て身を立つべく最後の決心の臍を固めたのであつた。

五、百難突破の十幾年

我邦古賢は艱難に臨みて歌ふらく

憂きことこの猶この上に積れかし

限りある身の心ためさん

これ我れと我身を勵まして、只管己が立志の爲めに何處までも強く奮闘する決意の表現であつて、此の精神は今猶我國民の胸奥に強き感銘を興へつ、あるが、君の半生の健闘史には此の如きことは連續的に現はれてゐる。少年早期の時代の商店見習員としての、苦難に對する心構えが、一々それであつたし、亦た此の勤勞の結果の甘蔗耕作が、結局勞して功少きを知り、是を断念して商業に立戻る時の決意がそれであつた。さあれ甘蔗小作事業を擲つた君は、將來の大志望を抱いて商業の中心地たる首都ホノルルに出で現在バラマ街の宮田商店前にて其當時商店を經營して居た従兄藤井順藏氏を頼り、その食料雜貨卸店に入り布哇に於ける實業界への進出の第一歩をスタートしたのであつた。時

に明治三十四年、君は十八才にて、今や青年前期に在りて、洋々たる前途を控へ、その胸奥には赫々たる野望が燃え盛つてゐた。

君の嚴父はヒロ市に在つて豫て灸點を業として居たので、君は能くそれに要する藥を求め、同市の白人經營の或藥店に足を運び、其店主とも馴染であつたが、右店主は君がホノルルに出たことを聞くや、豫て君を愛し其の才を惜しんで居たので、君の嚴父に説かして君を同藥店に迎へんとしたが、君は胸中確乎不動の覺悟と計案を以て決然ヒロ市を去つたのであるから、此の招きには應じなかつた。

藤井順藏氏の商店は順藏氏、及大島吉太郎、同壽平氏兄弟の三者の共同經營で、此の店から出雲大社に寄つた方には村上商店及本重商店など後年發展した商店があつた。此の時代はホノルルのビジネス・センターはフォート、ミアヌ及マーチャント街の邊りで、白人

の大會社商店が軒を並べてゐた。日本人商界は未だ開拓期に屬し、隆昌期に入る前であつたので、今日からふり返り見れば、未だ一体に微々たるものであつた。然し躍進の前期として、一角には近き將來の隆昌を仄めかす氣運が、ぼつ／＼擡頭せんとしてゐたことは、具さに觀察すれば受取られないこともなかつた。

藤井商店の商標は、藤井順藏氏のゼーと大嶋氏のオのイニシアルを竝記して其下に菱形の枠を描き其中に數字で三十三と記號してゐた。これは明治三十三年の開始を記念するものであつた。然し商標はゼー・オでも、總ての書式や、取引上の署名とか呼名はゼー・フジキであつた。店は素人の經營の事として、何となく活氣に缺け、業務不振で、兎角赤字續きであつた。特に順藏氏と養父大嶋吉太郎氏息平次氏の意見一致せず、びつたりした協力から生み出される發展力は少しも見られなかつた。加之其頃平次氏の實父大島壽平氏が故郷から渡布して來たので、大島氏の方は父子を待みて都合が良くなり、反對に藤井順藏氏の立場は益々

の青年であつたか、想像せられる。こゝにも君の健設的努力の一端が見られるのであつて、後年の發展は決して故なき事でないことが愈々確證せられる。

藤井商店は大島氏一家の經營に遷つても商務は依然として振はなかつたが、それは經驗不足や帳簿の不完全なことに起因してゐた。商品の賣却の際にも傳票を使用してゐなかつたので勢ひ記憶に依頼して、後に至り考へ出しては舊式の帳簿に記入して居たので、何うしても記帳落ちの商品があり、それが相當の額に上つてゐた。斯くて藤井商店の赤字は生れてゐたのであるが、烟眼な君は店に入つて間もなくこれを發見したが然し入店當時は未だ君の改革意見を實行に移し得る立場に君は居なかつた。

然し君は既に正式な帳簿の必要を痛感して居たので間もなく商業簿記法の勉強を始め、自ら苦心して研究する一方、その頃税關ブローカーのデフリースト商會に居た若林といふ人を講師に招いて習得した。

斯かる中に大島平次氏は病を獲て歸朝し、一方君は

悪化して、兎角面白くない感情を醸すこと、なつた。其結果順藏氏は明治三十五年に到頭日本へ引擧げて了ひ、其後を大島氏一家が經營すること、なつた。

扱て決然として出府した君は、ヒョを去るに際し囊中金十弗の小遣錢を以て居たが、勤儉力行にして着實の氣象の君は、此の十弗の小額を以て三ヶ年間の小遣に當るといふ、常人の到底爲し得ない緊縮を實行した。當時君は食事は店から供せられ、風呂は店から出る風呂札で間に合はせ、洗濯は自ら之を爲し、平日は夜遅くまで店務を見、日曜も絶対に外出しなかつたので、小遣としては散髪代の十五仙ぐらゐるが要るのみで、其他には殆んど使ふことがなかつた。當時は物價が總て安く、コーヒー一杯に餡パンが三つ付いて五仙だつた君は店務を終りて夜遅く錢湯に浴し、其歸途附近の支那人のコーヒー・ショップに立寄り、ホットした氣持で此の五仙の餡パン附コーヒー一杯を執るのが、唯一無上の樂しみで、月に二回位此の樂しみを味はつたと述懐して居るが、以て君が如何に意志固く勤儉力行

其頃旺盛であつた米大陸渡航を決心し、米本土に渡つて志を樹てること、なつた。かくて藤井商店の中心である平次氏と君を失つては、商勢依然振はない此の店は、今後益々窮地に陥り、大島壽平氏では到底革新は覺束ないので、君は大島氏が此上更に損失を招くよりも此際閉店して歸朝するが最も賢明な策と説き勧めた其際店の缺損額は帳簿の上で三千八百弗に上つてゐたので、スタッフを整理すれば不足品や評價以下のものある可く、缺損は何うしても五六千弗に上る見込みであつた。

然るに斯かる情態で歸朝することは大島壽平氏としては身を切られるよりも辛いことであつた。壽平氏は君の叔父に當り、村で最高の名譽たる村長を永年勤め縣會議員候補にも立ちし事あり、地方に於ける名士の一人であつた。然るに渡布に際してはさうした名譽も振り切り、所謂家運を此の一擧に賭して出立したのであつて、今更此の如き惨めな態たらくでは、老の身をおめおめ故郷へ歸つて行くことは出来なかつた。その

壽平氏の涙と歎息は遂に情に厚き君を動かすこととなり、君は米國轉航の志を翻すと共に異常なる決心を以て店を其儘引受け、叔父の爲めに藤井商店の再興と發展を誓つて立上つたのである。時恰も明治三十六年、年齢若き君は全責任を負つて其胸中既に確信を持つて居たと言へ、而かも異常なる覺悟を要した。

現在のホテル街の店舗は明治三十五年(一九〇二)に建築し、翌明治三十六年に移轉したので、君の活躍は新店舗に引移つてからのことである。明治三十七年になると君は一先づ叔父壽平氏を安心せしめて故郷に歸し、店は大島哲之助氏外四名と協力して經營した。店員は君を信頼し、君の意見に隨つて全員一致、一心同体の如くなつて努力を捧げたので、君の革進と理想は次第に實現して行つたが、而かも店の發展に献身してゐる君の苦心は、今日他人の容易に想像し得ぬものがあつた。

稼ぐに追ひ付く貧乏なしと言ふが、君は機敏穩當の奮闘努力を重ねたのであるから、其効果は著々數字の

であつた。さうした時自分の註文通り品物が入荷した時の喜びは譬へやうもなく、商人としての愉快さをつくく味はふのであつた。

爾後商務は君の經營宜しきを得て順調の一路を辿り明治四十五年まで十ケ年間に約數十萬圓を儲けて店を大島氏に引渡した。此間の一切の支配の實權は勿論君の手に在つた。そして君の給料は食付で一ケ月僅かに十二弗でスタートし最後に及んでも二十弗以上は取らなかつた。

君は此頃既に長男が出生してゐたので、漸く自己の獨立を考慮しなければならなくなつてゐた。そこでゼー・オー藤井商店のための努力十ケ年を機會に、赫々たる功績を残して店を大島氏に引渡し、愈々獨立することとなつた。其際君の永年の努力は酬ひられて、給料とボーナス及利子の貯蓄は積りて其額は四千五六百弗に上つてゐた。

店を引渡すに當り、君は規定通りの慰勞金を受けず千六百弗を貰つた。そして大島氏は此の決りが付くと

上にも實際の上にも現はれて、店を引受けた年には四千餘の純益を擧げ、之迄の帳簿上の損失を全く埋め其翌卅七年には五千餘弗の純益を擧げた。然るに曾て叔父が他人のノートを保證した額而約一千六七百弗を支拂はねばならぬ義務が掛つて來たので、非常なる經濟的及心的打撃を蒙つた。君は日曜日も休まず、全精神を打込んで刻苦奮勵二ケ年にして藤井商店を赤字より救ひ、こゝに浮み上つてホツとした時、此の全く思ひもかけない甚大な苦盃をなめさせられて一時失望したのであつたが、而かも堅忍不拔の君は一層の努力を重ねて毎月百弗宛を支拂ひ、遂に之を皆済した。此當時の苦心は流石の君も忘れ得ないものと見え、これを回顧する毎に「實に血の出る様な苦しい思ひをした」と述懐する。

その頃日本人商店の多くは日本へ商品の註文を發しても、資金が不十分な關係で、註文通り品物が來ない場合が屢々あつたので、船舶入港後註文通りの品物が到着してゐることを確めて初めて安堵するといふ有様

キング街の元川原商店跡へ移轉し、君は現在のホテル街に居残つた。君の手中には此時四千五六百弗の貯金と千六百弗の慰勞金とで、合計六千餘弗有つたが、此中から五千弗を出し、それに友人長尾氏兄弟の出資五千弗を加へて計一萬弗の資本金を以て、大正元年十一月に初めて獨立の旗幟を翻した。時に君の春秋正に二十八、長尾、藤井の頭字エヌ・エフを菱形枠の中に記した商標をかざして颯爽と起ち上つた君の姿は、青年實業家乍ら、大きな商才と多年の經驗を兼備したる頼母しき姿であつた。

話は前に戻るが、君が獨立せんとするや大島壽平氏は君に説いて曰ふには、汝自身の貯金と今分配する一千餘弗を加えれば約六千弗となるが、これだけの金額は日本の田舎に在れば有数の資産家なれば、生活は安樂であり附近から尊敬も受ける故に速に歸郷するが良策であらうと、心から奨めるどころがあつた。若し君が小成に安んずるの士であつたならば、必ず叔父の言に従つたであらうが、君は斯かる錦衣歸朝を聞くには

餘りに遠大なる希望の持主であつた。

君は常に事業に對して背水の陣を布いて臨むといふ一貫した固い持論をもつて居る。それは君の鐵則にして、此の心構を有つてこそ始めて事業に全力を傾倒し得るのであつて、百難突破も亦可能なのである。即ち背水の陣を布く者は既に自己の生命線上に起つて居るのであるから、其處には前進と向上の道が在るのみであつて、後方は千仞の谷であり、一步退けば生命は危険に晒される。其の決心と自覺があつてこそ百難にも挫けぬ意氣と力が産まれるのである。

『二兎を追ふ勿れ、一業に全力を盡せよ、常に背水の陣の覺悟を以て臨め』と君は常に後進を訓誡し、知友に忠告する。まことに獅子は一匹の兎を獲るにも全力を傾けるといふが、百獸の王にして已に斯くの如しとすれば、其他の者が如何に強大なる決意と努力を要す可きかは明白である。君の『一業に對して背水の陣を布く』といふ持論の精神は即ちそこにある。何事にもあれ一業の成功は異常なる決心と努力を要し、力が

分散したり、二者を追ふては到底爲し遂げ得られるものではない。君は此の持論を熱心に他人に説くばかりでなく、それを實踐して今日の大を成した。この持論を斷行する者が總て一定の大きさに成功するとは限らないが、たとへ其成功に大小の差違はあるとも、此の決心を持つて當れば何人も自分相應の發展を遂げ得ることは疑ふの餘地なく、幾多の實例が残されてゐる。

君が藤井商店を大島氏へ引渡し、新たに獨立創業するに際して、或懇意なる人は君が自己の所持金六千弗を全部創業の資金に提供せんとすることを戒め、其半額を以て之に當て、残る三千弗は保管して、他日若し君が事業に失敗するが如き場合ある時、之を以て郷里で生活を樹てる準備金とすべしと説いたが、背水の陣を布きて全性能を傾倒することを以て鐵則とする君は此忠告に一顧も與へず、斷乎として所信を貫徹したのであつた。また君は最近友人某君が創業するに當り其の相談を受け事情を聴取したが、其際友人の心構へに間隙があり全力が傾けられてゐないことを發見して、

諄々として諭し、一步退けば斷崖であるといふ所謂背水の陣の決心を慫慂し、鞏固な決意に基く眞劍な努力を導いたのであつた。

而して君の言葉の眞理と厚き友情と眞劍な忠告とは友人を動かしたことは言ふまでもない。君の持論は如

何なる場合、如何なる事業に對しても一定不變である君はそれを君自身に實踐して成功の模範を示したが、今後も復常に此れを實踐して撓りまず前進を續けて行くであらう。

六、獨立獨歩の潤天地

明治四十五年即ち大正元年十一月に獨立の旗幟を高く掲げて今や一國一城の主となつた君は、其年の暮の二ヶ月間に大いに振ひ、數千弗の純益を挙げ、同二年及三年に數萬弗を剩した。斯くて（一年一年と）商勢振ひ、利益は増加して全く隆運の流れに乗つて來た出資者長尾氏兄弟も君に信頼して總てを舉げて君に一任して來たが、大正六年に至りて多少意見の相違を來したので、君は長尾氏兄弟の藤井商店に對する權利を買収すること、なり、其の出資額の五千弗以外に權利に對して五萬數千弗併せて六萬餘弗の支拂ひにて圓滿に

解決すること、なり大正十一年迄に利息を附して皆済した。君が長尾氏兄弟と袂を別つことが決つてから長尾氏兄弟の恩義に報ひる爲め謝恩會を催し、金盃一組宛を贈呈したことは隠れたる美談である。斯くして藤井商店は茲に全く名實共に君一個人の掌中に歸したのである。

斯うした機に際して、常人は直ちに自身の所有權を殊更に世間に表示する行爲を執るのが常であるが、君は敢てそれを爲さなかつた。其最も良き一例として商標の從來の儘の据置きを舉げることが出来る。即ち藤

井商店の商標は、君が自己の資金と長尾氏兄弟の出資を併せて、新たに獨立して藤井商店を起した際、菱形枠の中にエヌ・フと英字を記入したものを採用したが、これは長尾と藤井の頭字を取つて併記したものでそれは兩者の合同出資を表徴する記念であつた。然るに君は長尾氏兄弟から一切の権利を買収して、名實共に自分の所有にしても之を改變せず、其後更に廿有餘年を閲し今日の大を成すに至つても依然としてエヌ・エフの商標を常用してゐる。普通ならゼー・エフとすべきであるのに、君は依然として其古きを用ひ、一つには當時の長尾氏兄弟の厚意に對して無言の敬意を表し、復た一つには自己の創業當時の事を永く心に銘記して自己の戒めとなす、其は實に信義報謝の美しき信念に基くもので、普通人の眞似難き床しくも亦た貴き龜鑑である。

其後の藤井商店の發展の經過を記述すれば限りがないが、之を一口に言へば同店は爾來旭日昇天の勢を以て進展を續けたのである。そして君は大正八年三月、

店務を藤川壽郎氏に一任して歸朝、廣島市材木町二十番地(舊事務所)に藤井商店輸出部を創設して盛んに輸出を行ひ、自ら度々日布問を往復して業務を監督し且つ新事業を創め、日本に於ては個人の資産の運用に活躍する一方、倉庫業等の新事業をも起して益々發展し、今日の隆昌を見るに至つてゐる。

君の發展は布哇に於て其土臺を築き、更に日本に歸つてその中樞を加へたのであるが、布哇に於て多年在外邦人の海外發展上貢献した功績が認められ、昭和五年十一月には産業協會から表彰せられ、翌年一月には畏くも總裁伏見宮殿下の御招宴を受けるの光榮に浴した、この産業協會の表彰は頗る權威のあるものにて、個人にして表彰を受けたる者は少く、多くは團體や會社が之を受けてゐる。

以上叙し來つた所を熟覽すれば、君の頭腦の明晰にして商機に敏達なることは言はずもがな、其事に當りて百折不撓の忍耐力に富み、且つ窮して焦らず、能く細を積み微を重ねて大を成し、而かも富みて傲らず、

廣く人材を集め各々其天分を盡くさしめ、何處までも共存共榮の精神に準據して邁進する等、幾多の美點長所が集積され、遂に今日の如き輝やかしき大成を收め

得たのである。猶以下君の長所と圓滿なる人格の一端を敲き、以て江湖の模範としたい。

七、人物使用の妙諦

賢明なる君主の下に暗愚の臣無きが如く、凡そ大業を成し或は大名を揚げし古今の偉人の下には、必ず當代の人材が網羅され、それらが一致協力して活躍してゐる、それは賢人賢者を知るの謂で、上下共に相互の價値を知り、相理解し、相協力し、結局は持ちつ持たれつの美しい功績を其處に生むのであるが、而かも先づ其統卒者が賢明にして且つ溫容誠實の士で有ることを第一條件とする。即ち君が今日の成業の跡を見るも復た此の理を以て解説することが出来る。

君は事業經營の上に於ても、亦た人物使用の點にても共通不偏の理想を有つて居る。そして君はそれを著々實踐して來た。その理想とは何であるか、即ち「共

存共榮」であつて、君は之を理想とし或はモットーとして來た。人を起つ能はざらしめて自分のみ浮み上る事は、君の最も不可とするところ、隨つて君の理想から割出された人物使用の原則は徹底的の温情であつて、それに依つて使用人は救はれ進んで自己の全能力を舉げて活躍するのである。其の二大原則とも云ふべきものは

- 一、使用人の生活を保證すること
- 一、永く勞苦を共にした使用人は、不可能でない限り最後まで救援すること

君は此の原則を守つて店員を優遇し、其の家庭生活を保證する、即ち彼等の日常生活は一定の月給で支持

し、ボーナスは擧げて貯金し得る様待遇し、また貯金せしめて居る。随つて店員は眞面目に忠實に勤めて行く限り、毫末も後顧の患がないのみならず、他方には貯蓄が年々累加されて行くから、物心両方面に安定が出来来る。そこで彼等は愈々献身的に活動し得る譯である。よく世間に見られる使用人が窮餘の餘りに犯す不正などは、君の原則下では其使用人が眞面目な生活に在る限り起り得る譯はないのである。君の使用人は相當多數に上つてゐるが、ボーナスの形式に於て彼等に與へらるゝ分配金は巨額に上つてゐる。つまり純利益は其中から資本金の利子を除いて残りは資本主と使用人と折半してゐる。故に店主も幹部も店員も、徹頭徹尾一心同軌の大家族の觀をなし、君は店員達を物心両方面に於て一步一步理想へ向つて導いて行く。君の

八、其の人生觀

多年社會の波瀾を乗り切り、且つ父祖より代々佛教

店員の養成法は理想と實際とを調和したもので、精神の鍛鍊も伴ふ。即ち店員を身の戒めとして便所の掃除から始めしめ、下ツ端の仕事から漸次に引上げて行くのがそれで、何人も皆一度は此の關門を通過しなければならぬ。君の店に於て久しく樞要の地に働きたる幹部は、既に堂々數十萬圓の産を成して居る人もあり古參株は何れもみな相當巨額の貯蓄を成して居る。

「藤井商店は一本の木の如きものである。其の幹が榮える以上枝葉も共に榮へる可きが當然である」といふ君の言葉は、其儘實際に移されてゐて、それが人物使用の妙諦を爲してゐる。それは寔に徹底したる共存共榮の精神の現はれて、そこに君の人格の閃めきを明瞭に看取することが出来る。

信者である君は、温容圓滿なる人格の士であつて、其

人生觀も亦に自然の命數を從順に許容する佛教より來たる『諦め』の一語に歸着する。然しそれは何處までも自然の法則に徹し、自然の命數を見極めた『諦め』の要諦であつて、世上俗に見る何でも彼でも無造作に放棄する誤られたる諦めの觀念ではない。

君は曰ふ、凡そ人生には何か一つの信仰がなくてはならないが、それは宗派の如何を問ふものではない、信仰は信仰であつて、其本質に於ては同じものである。たゞ信仰あるところ徹底した落着きと、魂の力が有る、其の心の中の炬火の如き信仰の下に、急がず騒がず、心を悠然と落着けて爲すべき事は徹底的に成し遂げるやう、何處までも努力し、人事の最高を盡して天命を俟つ可きである。若し全性能を傾け盡して成らざればそれは最早天命であつて、人事の克く如何とも爲し得べきところではない。斯かる時、人は能くその自然の命數を見極め、それに隨ひて自己の心を整理して行くところに眞實の諦めが生れるのであつて、成らぬからとて何時までも嘆き悲しみ、取り亂して了ふのは信仰

が薄弱なるが故である。大自然の齎す運命は人爲の如何とも成し難きものであれば、盡すべきを竭して後は從順に天の配劑に任すべきである。

君は又曰ふ、然し若しも人事を充分に盡くさずして之を斷念し、或は放擲して恬として顧みない態度は誤りの甚だしきものであつて、それは寢て居て好運を待つと殆んど選ぶところなく、自分の最も排撃するものである。人は何處までもベストを盡くさなければならぬ、ベストを盡くし愈々最後の術も智も努力も盡き果て、然る後に初めて觀念するのであつて、天を恨まず、人を怨まず、己を悔みず、自然の命數を靜かに受取るのが、我輩の『諦め』の極意である。

抑、信仰は理窟ではない、理智でもない、故に理窟を極めただけで信仰に入れるものでもなく、理智にのみ頼りて信仰を得られるものでもない。それは心眼を開いて得る心の悟りである。随つて忙しい近代生活を爲し、負擔し切れない程色々な事に迫られて居る者は、尋常一様では信仰に入り難い。何か大きく深い動機が

あつて豁然として其心の奥に心眼の閃く時、初めてほのほの光明が射して来るものである。信仰は心の慰安を與へ、死後のことを教へ、魂の安住所を授ける。それは金錢に依つて購はれるものではなく、智識を以て求められるものでもない。例令巨萬の富を積むも、信仰なく魂の安住を得ずしては、自然の命數を靜かに受け容る、能はず、其の臨終に於て一大恐怖を感じ、見苦しくも且つ不幸なる終局を爲すであらう。斯かる人こそ人生最大の不幸の人と言ふべきである。

たとへ百萬圓貫ふとも大して喜ばぬといふ君は、信仰に依つて現世の事象に心の見苦しき動搖を起さないだけの悟りを開いてゐるのであるが、而かも君は金錢上に不自由を感じたことがないと言ふ。空手で奮闘努力時代と雖も、何うにかしら自然に金錢上の路は開けて不自由を感じた事がないのであるが、それは君が好運に恵まれて来たこと、又一つには君の人徳が反映して路を通せしめたのである。君の深甚なる精神的苦痛は之迄に凡そ前後二回あつた。その一はハワイに

生れた次男勝雄君が病弱なため大正四年に母に仲れて歸朝せしめたが、骨膜炎を發して入院一ヶ年、漸く全快して歸布し、更に大正八年再び家族を擧げて歸朝、翌九年疫病で没したことである。君は此の際事業上の都合で次男の病氣を殆んど看てやれなかつたのであるが、此の突然の死去に親としての責任と愛情の苦惱にいたく心を傷めたのである。

また大正十年十一月廿六日に夫人が不治の病で死去した時は、一層の心痛を味はつた。夫人は君の創業前より最も努力奮闘を要した時代に苦樂を共にし、君の内助者協力者として献身的に勤めた人で、漸く搖がない君の基礎が固まり、愈々之からだどホツとした時に夫人は此世を去つたのであるから、君の嘆きは色々の意味に於て一層深甚なるものがあつた。此時は流石の君も一時心暗く嘔た人生の儚なきを痛感したのであるが、然し君は信仰の力に依りてそれを靜かに受け、靜かに味はひ、行ひ濟ます大徳の如くに體ては諦めの境地に入ることが出来た。夫人の没後今日迄君は再び妻

を迎へず、爾來十數年ずつと獨身を押し通してゐるが此の事實を口さがない者は何とも言へ、それは儘か

に諦めの境地を体得してゐる君の人格の貴い半面に違ひないのである。

九、實業上の主張

資本と勞力は完全に協調一致して行かねばならぬと言ふのが、君の實業上の主張であり、又た事業經營の根幹を成す所の原理である。それは既に屢々前述した如く、君の共存共榮の主義の現はれであつて、持ちつ持たれつして互ひに援け合ひて行くのでなければ眞の繁榮はないといふ見地から、君は之を事業の上に實踐して居るのである。隨つて君は事業上に於ける利益は個人の壟斷すべきものではないと言ふが、而かも這は言ひ易く行ひ難きことであつて、口に此の一大理想を説く者、必ずしも其實行者ではなく、今日凡ゆる事業に之を視るも、其を實行しつ、ある者の如きは、殆んど皆無に近しと言ふ可きであるが、其中にありて君の如きは潑刺たる之が實行者の一人である。

君は藤井商店を一本の大樹の様に育て培つて来た。既に伸びる木である以上、幹が榮えればそれに従つて枝や葉も榮えるのである。人事を盡して不可能な場合は致方ないが、それでない限り此の大樹に付隨する者は、其の幹が榮へる以上みな榮へなければならぬ。それが君の事業經營上の理想であつた。そこから利益の勞資分配や店員の生活保證や、恩給制度、勤績者表彰などが生れた。それは即ち共存共榮の理想を實際の上に移したものでなくて何であらう。君の事業は斯くて主人と使用人とが幹と枝の關係を保ち、自ら求めて協力し、奮勵して遂に今日の繁榮を來したのである。其他君の説く實驗と理論の中で主なるものは、自分を知る事である。自分の事業に成功するか否かは眞實

の自己を知るや否やに依つて岐れることが多いと君は曰ふ。即ち自分を知る者こそ、分に應じた行動企劃を爲し、且つ絶ゆることなく努力するからである。そして亦た君は融資の點に就ても言ふ、『自己の事業上に銀行の金を頭を下げて借り入れて来るのでは成功しない』と、これは銀行の融資を拒否する意味ではなく、其融資金の性質やそれに伴ふ事情の如何を指すのである。つまり平身低頭して銀行から借りるのでは、其人の事業や資格に不十分のものがあつて、銀行はそれに融通することを歓迎しない譯であるから、其處に無理があり、生きた資金とは言ひ難い。銀行からの借入れは銀行自身が氣持よく貸出するものでなければなら

十、公共的事項

君は實業家の權化たると共に、亦た社會的公共事業援護者の一人である。而も麗々しく表面に其名を表さる、を避け、隱に援護せるもの其の幾何なるを知らず

ぬといふのである。斯かる金こそ其貸借上に無理がなく、資金として始めて生きた効用を爲すのであつて、君の言葉は事業家の好く含味す可きものである。要するに君の事業に於ける理想なり主張なりは事業其物の大家族化のやうなものである。其處には幾多の小理論や制度や規定はあるが、結局其根幹に於て一家共に榮へ、共に伸展するといふ一元的目標に向つて、各々愉快に自發的の協調努力を爲して行くのであり、事實それを實踐しつゝある。世は勞資爭議など殆んど間斷なく繰り返されてゐるが、君の此の朗らかな事業精神と其の實行振りは之等の現象から超然として聳え寓意ある示唆を投げかけてゐると言ふ可きである。

就中布哇關係の雜多の公共的事業と人物養成上の學資提供は最も其數量多く且つ容易に他の眞似得られないところである、君は郷里廣島に於て、公共的事業とし

て其名を表出せるは、海外移住組合理事、廣島縣拓務協會理事等に過ぎないが、畢竟君の性格として、虚名と出酒張りが大禁物であるから、其表面に現はれてゐるのは極めて僅少の部分に過ぎない。されば君が幾多の社會事業や、布哇關係事項や布哇からの來訪者觀迎などに裏面に於て寄附してゐる事は莫大な額に上つてゐる。君は亦人材の養成と適用には頗る努力し、優良

十一、家

君の家系は代々長命な方で、其祖父は九十六の高齡を保ち、家嚴重助翁も又九十歳の長壽を重ねて今より十年前に歿せられた。従つて攝生宜しきを得ば長命を保ち得る天恵があるのであつて、君も亦此の幸福に浴すことを期待せられる。

君の夫人は大正十年十一月廿六日に廿九歳を以て早世されたが、爾來君は獨身生活を保つて居る。而し君の家庭は令息や令孫などで至極賑やかで、君はそれ等

庭

學生に學資を提供してゐるが、これは最も有意義な奉仕事業の一つである。既に君の援護の下に大學を卒業して就職した者五六人に上り、専門學校を卒業して實業界に入つた者は四五名を算してゐる。以上略述せる外、若し仔細に君の隠れた佳話美談を索め來らば、擧げ切れぬ程に多々あるべきであらうから此には單に其片鱗を擧ぐるに止めておく。

の近親者に取り巻かれて、あがめ親しまれてゐる。それは大いなる傘の下に睦み合ふ肉親や近親の團圓であつて、そこには常に春風駘蕩の氣満ち、文字通りスウィート・ホームを形造つてゐる。その一家族は次の通りである。

◎夫人かつ子氏(死亡) 大正十年十一月廿六日廣島市に於て病没。

◎長男順三君 明治四十四年八月卅一日布哇ホノル

ル市松本レーンに於て生れ、歸朝後日本で教育を受け、明治大學商科を卒業後は父君を輔けて家業に執掌して居る。父君に似て資性温厚、且つ度量に富み、大藤井の後継者として父君の名を辱めない御曹子である。昭和六年結婚し、夫人笑子さんとの間に長女喜子(六才)、長男順二(三才)、次男賢三(二才)の二男一女がある。

◎次男勝雄君(死亡) 大正九年八月六日、日本に於て病歿。

◎三男春雄君 大正四年八月十五日廣島市に生れ、昭和十三年春明治大學商科を卒業し家業に従事してゐるが、頭腦緻密にして勤勉、父兄の良き輔佐役として重きを爲してゐる。昭和十三年十月十五日徳山市外河村氏の令嬢艶子さんと結婚した。

◎四男洋一君 大正五年十二月二十四日布哇ホノルル市ベンサコラ街一二二一番地の舊住宅に生る。目下慶應大學法學部第二學年に在學中だが、卒業の曉は藤井王國の法律顧問として良き代辯者たる可

く期待されてゐる。

◎長女かつえ嬢 大正八年二月廿六日ホノルル市ベンサコラ街の舊住宅に生る。歸朝後廣島縣立高等女學校を優等の成績で卒業し、爾來家庭に在りて父兄に仕へて居る。

君の本邸は廣島市材木町二十二番地に在るが、純日本式の奥床しい住居である。また同市中島本町二十二番地の別邸は昭和十年の建築にて、本川に臨みて眺望宜しく、梅及櫻作りの日本式樓屋は輪煥の美と調度の結構を極め、高雅瀟洒にして、流石に多年の君の美術趣味に依りて構成されし事が肯かれ、恰も名工苦心の作に接する感がある。また東京市品川区五反田五丁目六十番地の別邸は令息春雄君の設計に成るものであるが、和洋折中の近代的感じの好い邸宅で池田山の静閑な空氣に調和して見事な映えを見せてゐる。京都市烏丸通り一條上る西入りの別宅も和洋折中にて蕭洒な作りである。布哇ホノルル市の方ではベンサコラ街の舊邸を學校に買収せられ、昭和十二年ベンサコラ街ハッ

センゼヤー角の白塗り洋風の大邸宅を購入して、これに一大改築を施し、面目を一新したが、これは日本の

本邸及別宅とは全然趣きを異にする純粹の洋風趣味が漲つてゐる。

十二、趣

味

君は本來多趣味の人で、その繁縷複雑の業に没頭し乍ら、少閑を其の趣味の爲めに割愛し、身心の愉快とし且つゆとりと雅致を養神の糧とする。蓋し時に臨んで心機を轉換して、其心を別天地に置くのは、神心保全の道として古來偉人英傑の屢々之を繰り返した所である。即ち豊太閤が陣中に在りて茶を點し能舞を演せし如きは最も著しき實例であらう。

君は物事に熱心にて徹底せされば歌まぬ性質の人であつて、趣味に於ても亦その傾向を現はし、單に其の門を覗くに止めず、深く蘊奥を敲かざれば我慢出來ぬといふ凝り性が見受けられる。

君は亦スポーツ趣味も深く、全般の運動に對して理解を持ち青年時代から壯年時代にかけて數種のスポー

ツに熱注したが、其中でも野球は知友間に於ても有名なものであつた。即ち君の布哇に於ての奮闘時代、明治四十二年頃ア、ラ公園を本據としての邦人野球全盛時代を中心として、其前後の數年間を、これに没頭し自ら天狗俱樂部の投手として曲球を得意とし、幾多のスターを惱まし、三振凡打に討ち取つて味方を勝利に導いた事は少くない。後年の大スターも君の魔球に誘弄せられて、君の球名はファンの中にも擴まり、今日尙野球の縁で君の名を忘れ得ぬ者は頗る多い。君は只單に自らプレイするのみでなく、費用を提供して天狗俱樂部を援け、且つ若き後進を導くなど、野球界に隠れた貢獻もあり、布哇邦人野球全盛時代の功勞者の一人としてスポーツ史の一頁を飾るものである。

いま君の趣味の中著しきものを擧ぐれば

○讀書 ○園碁 ○書畫骨董

などであるが、その中で讀書は宗教に關するものや事業關係の實業經濟書及政治方面のものが最も多く、少年時代以來萬巻を讀破したといふ事が出来る。君は寸暇あれば、家に在りても、車中にも讀書するが、それは既に趣味的な讀み方ではなく、眞剣な勉學であり研究である。園碁は初段に一二目といふ實力を有してゐるから、素人間には滅多に君と太刀打の出来る者はない。一時はこれに非常に凝つたもので、其の時代の熱意を持続したなら今日は段碁になつて居たであらう。繪畫の蒐集に至つては、多く類を見ない程の鑑識眼を有し、幾多の名書逸品を集めてゐる。而かも君は書畫骨董は何處までも趣味に徹してやるのであるから、自己の購入作品が値が上つたからとて直ちに賣立てるやうなことは決して爲さず、交換することも殆んど無い。蒐集の範圍は近く百年以來の名作に止めて、餘り古き所を漁らないが、それは君の好みに依つて動くの

であり、且つ限りある時間を以てさう廣範圍に亘る餘裕なき爲めならむが、こゝらが君の己を識れる明智の然らしめる所と言ふ可きであらう。

記者はまだ君の蒐集品の多くを見るの機なきも、其の片鱗を見るに、明治以來畫壇の俊髦として稱贊される巨匠の作を多數有ち、寸紙零墨も、千金當ならざる佳構傑作を無數に所藏してゐる。其は君の確かな鑑識眼にかけて求めるのであるから、所謂擱まされることもなく、決して好い加減な作品を手に入れることもない。従つて其の所藏品は何れも皆購入當時からすれば價格が上つてをり、中には數倍乃至數十倍になつてゐる名作も多い。君は亦當代一流作家と往來して書談を交へその作風に接して、繪畫趣味を味はふ旁ら、彼等の快心作を獲るを以て樂しみの一つとしてゐる。それは蓋し君の人格に益々優雅温容の磨きをかけるものであつて、亦た以て君の胸間には清風明月の絶えざる訪れあり、花鳥翎毛の不斷の音樂の奏でられつつあることが偲ばれ、床しども床かしき限りである。

昭和十三年十一月二十日印刷
昭和十三年十一月二十五日發行

(非賣品)

「昭和日本百種傳第十五篇——藤井順一」奥付

著者兼發行人兼印刷人

藤井石童

大阪市北區見野町二十八番地

印刷所 美術日報社印刷部

大阪市北區見野町二十八番地

發行所 美術日報社

大阪市北區見野町二十八番地
電話口座内阪六九二〇七番

不許複製

54-1593

